

農村女性の世代間分業にみられる変容過程

—— 岩手県湯田町左草集落における事例をてがかりとしての予備的考察 ——

竹村祥子・小野澤章子¹⁾

〈1〉はじめに

本研究は、1988年8月に実施した岩手県和賀郡湯田町左草集落の調査²⁾に引き続いて、同一地区の女性を対象として、1989年12月におこなった面接調査の報告となっている。

農村における「近代化」を問題にすると、家族農業の「崩壊」、若年層の農業離れ、農作業担当者の高齢化、農村社会の「崩壊」等の視点からの研究は数多く展開されている。しかし農村に生活する家族が、様々な農村の変化とともに家族としても「崩壊」してしまったかどうかという点に関してはまだ検討の余地がある。と言うのは、農家のみならず農村に生活する家族は、成員を他出・離家させて家族自体を縮小させながらも、農業の近代化や農村の変化に対応し、農村のなかで存続し続けた家族であり、「農家」として存続したかという点では否定的な答えを得る家族も、家族生活まですべてなくしてしまっているものではない。すなわち、家族として農村の変化や農業の変化に対応した結果としての現存状況とみることができるのかも知れないからである。この意味において、農村にある家族を捉えた研究は意外に少ない³⁾。

本研究の射程は、1988年調査同様、「日本近代化における東北農民の主体的な対応過程に関する実証的研究」から離れるものではない。本調査では、農村における家族の近代化への対応過程を捉えるため、農村に生活する女性の結婚年から、「引退」までの間、農業就労、農外就労、家事・育児の3点にかかわる役割をどのように配分していたのか、また、個々人のライフ・イベントと上記の役割との関係はどうなっているのか、さらに、農外就労につくことが農業や家族内の役割にどのような影響をあたえたかについて探ることを当面の目的とした。

1) 明治学院大学大学院

2) 山崎達彦・横井修一・細江達郎・竹村祥子『「産直」(産消提携)運動の展開と農民意識』『アルテス・リベラレス』第44号 1989年 79～118ページ

3) 農業が専業形態から兼業形態へ移行したり、さらには、農業をやめてしまっても、農村での生活を継続しないことと同じではないという点への注目と考えている。

〈2〉調査概要

調査方法

調査日時：1989年（平成元年）12月9日～12月11日

調査対象者：左草集落に住む既婚女性（80歳以下）54名（世帯数34戸）

調査方法：調査員による面接聞きとり（他計式）⁴⁾

回収状況：意識票46／54 世帯票31／34

調査の内容

基本的属性

農業・農外就労の状況

家事・育児の担当状況

家計管理

生活圏

地域活動歴（婦人会、「生活グループ」、婦人学級等）

世帯での自動車の保有状況・免許の取得状況

意識項目（農業、家族、女性の就業、婦人会活動等）

調査地の概要

岩手県和賀郡湯田町は、岩手県西部に位置し、西は奥羽山脈を分水嶺として秋田県に接し、北は沢内村、東是和賀町、南は胆沢町に接している。気候条件は、岩手県においても有数の豪雪地帯で、夏も冷涼である。この夏の気候を活かして近年ではリンドウ等の花き類やいちごの栽培が伸びてきている。左草集落は、(図1)30有余ある町内集落のなかでも中心市街地から比較的離れた山村である。左草地区³⁾は、水稻を中心として、農業を主な産業とする地区であり、1戸当りの耕地は2.41ha、こ

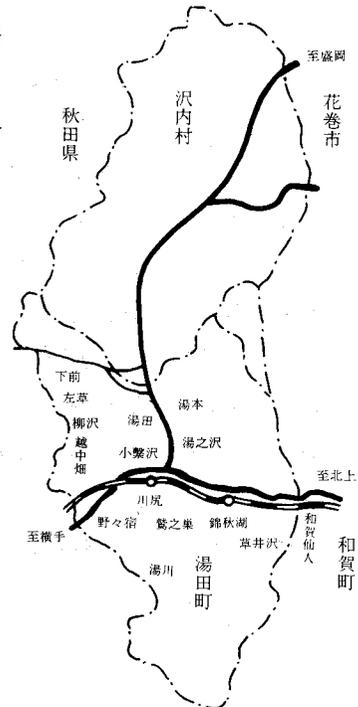


図1 調査対象地

4) 調査員は、小野澤のほか上村隆之、蝦名孝一、清水大輔、手塚友子、八島正夫の協力を得ている。

のうち田1.65 ha, 畑0.77 ha (農業センサス 1985 年) となっており, ともに町の平均を上回っている。経営形態からみると, 若干ではあるが, 町内他地区にくらべて第一種兼業が多くなっている。販売農家戸数は少ないものの作目として近年伸びてきているのは, トマト・ほうれんそう・いちご・牧草・花き類があげられる。

〈3〉 調査結果

1. 分析の視点

個人のライフコースをみていくために, 結婚年・子どもの出産年を手がかりとして, 就労または家事からの引退の年までに, 農業と農外就労と家事・育児をどの様に担当していたかをみる。続いて, 個々人のライフコースを世帯単位にまとめ, 世代間相互の関係を考察する⁵⁾。

個人については, 第1ポイントを結婚年とすると, そこから就労および家事・育児から引退する時点(第4ポイント)までの間にふたつのポイントを確認している。左草の女性は基本的には, 結婚年(第1ポイント)直後は就労中心の生活になる。この就労には農業も農業以外の就労も含まれる。そしてこの時点で家事・育児といった役割の中心的位置にすることはない。第2のポイントは労働のみの生活に家事・育児が加わる時点である。個人によって仕事と家事・育児のバランスに違いができるものの, この第2ポイントから第3ポイントまでは, 就労と家事・育児役割を平行して担う時期となる。そして, 就労の第一線から引退する時点を第3ポイントとすると, このポイントを過ぎることで女性たちは家事・育児中心の生活に入る。さらに家事・育児も次の世代に任せる時点を第4ポイントとした。

各人のポイントの決定, 特にならば家事の担当を変えたかという点は, 対象者自身が回想によって回答する方法で聞き出したもので, 客観的には決定しづらい対象者もあった。その場合, 世帯内に複数の回答があれば2つ以上の回想を突き合わせて確認をとり, それ以外は, 対象者の決定によることとした。これは農家において家庭内役割といった場合, そこに農業経営が含まれることがあり, それと家族内での役割とを峻別することがむずかし

5) 農業センサスでは, 左草地区として, 本調査の対象集落と下左草集落が一括されている。

6) 本研究は「家族の発達と個人のライフコースにおける共時性(synchronization)を歴史的条件的変化との関係においてみること」までを目的としているが, 本稿では, 社会状況との関連については扱っていない。

正岡寛司・藤見純子「歴史的ライフコース分析の視点——ハレーブンの場合——」森岡清美・青井和夫編『ライフコースと世代』1985年 垣内出版 27～28ページ

い場合もあると考えたことによる。

これらのポイントの時期、就業の内容、あるいは就労と家事・育児とのバランスや変化の型が同じものに注目すると、5つの型が抽出される。

2. 5つの型について

I. 農業型

対象者46名のうち、これまで農業以外の就労を一切したことがない人が10名いた。この農業型の対象者T.Tさんを例としてみる。

T.Tさんは、大正14年生まれ、64歳（調査時）であり、結婚したのは昭和18年で、昭和19年生まれの長男を頭に5人の子供をもつ（末子昭和31年生まれ）。T.Tさんが結婚した当時、家事・育児は姑が受けもっていて、T.Tさんは主に農業に従事していた。昭和29年に姑が死亡し、家事の役割もT.Tさんが担当するようになる（T.Tさん30歳）。夫は建築関係の勤めにでていた。昭和35年には農業を担当していた舅が死亡し、T.Tさんが農業を引き継ぐ。昭和42年に長男がKさんと結婚して同居、Kさんは体が弱く、家事はT.Tさんの分担のままであった。昭和45年に孫が生まれる（T.Tさん45歳）。この時点で孫の育児のために農業は長男に任せ、家事と育児が中心の生活となっている。

以上の事例からも分かるように、この型では結婚した当時、彼女らの生活の中心に位置づけられたのは農業であり、家事や育児などは上の世代の担当となっていた。

その後、家庭内のことを担当していた上の世代が高齢のため、体が弱くなったり、あるいは死亡する事によって家事などの役割は対象者世代に移ってくる。最終的には対象者の孫の誕生によって育児を担当することになり（第2ポイント）、対象者が農業、家庭内の役割を一手に担うこととなる。これが対象者の40歳代から50歳代くらいにかけての時期にあたる。この時期のこの農業型の女性は大変負担が大きくなる。

対象者が60歳前後になると加齢とともに体に無理がきかなくなることもあって、この高負担の状況を継続することが困難となる。この状況から抜け出す際（第3ポイント）、この農業型では農業の中心的担い手であることをやめることによって、家事や育児を中心的に担う生活へと変化する。その後は家事や育児の担い手としても引退し（第4ポイント）、完全な引退状態になる。

この農業型に分類できるものは、対象者のうち10名で、本人との面接はできなかったものの対象者からの話を通して確認できた2名を加えると、合計12名となった。この12名の平均年齢は69.3歳、現在も農業と家庭内の役割の両方を担う負担の高い状況にいるもの5名（平均年齢66.8歳）、農業の担い手では無くなっているもの5名（平均年齢66.6歳）、完全に引退しているもの2名（平均年齢82.0歳）であった。この農業型の平均年齢は5つの型のなかで最も高かった。

この農業型では、まず農業の労働力として生活を送り、農業労働力として引退し、その後家庭内の役割を中心に担うようになっている。(図2)

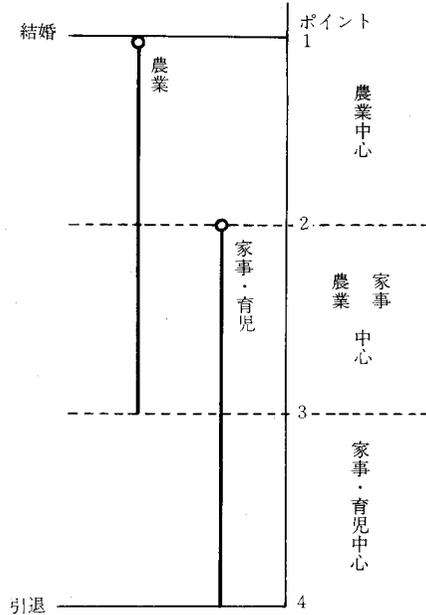


図2 I 農業型

II. 農業+農外就労経験型

この型は農業型と同様に、結婚した当時は農業中心の生活である。農業型と異なるのは、この型に分類できるものは、後に農外就労を多少とも経験する点である。

農業+農外就労経験型の事例としては、T.Aさんが挙げられる。T.Aさんは大正14年生まれの64歳(調査時)で、昭和22年に結婚、昭和24年から32年にかけて4人の子供を生む。その当時、姑とその姑の母が健在で、家事や子供の育児はT.Aさんの上の世代が担当し、T.Aさんは農業に従事している。昭和39年には(T.Aさん39歳)、姑の母が亡くなり、姑も体を悪くして、T.Aさんの家事の負担が増えていく。昭和41年から43年にかけて、農閑期に左草集落内で道路工事などの農外就労に従事する。この「日稼ぎ」を始めた理由として、T.Aさんは次のように言っている。「近所の人もみんなやっていたし、私もやってみたかった」。この農外就労を辞めたのは、集落内の道路工事が少なくなったこともあるが、昭和43年には(T.Aさん43歳)姑が死亡し、家事や育児の担い手の中心がT.Aさんの役割となったことも影響していると考えられる。T.Aさんが50歳になった頃、「農業も前の様には働けなくなってきた」。昭和57年に次男がBさんと結婚して、同居することとなる(T.Aさん57歳、長男は死亡している)。それを機会にT.Aさんは家事をBさんと分担するようになる。

以上の事例で見ると、農外就労の経験がある場合、結婚当初農業に従事し、その後、農業の中心的担い手となる。さらに農業とともに家事・育児を一手に担う負担の高い状況が持続している点が特徴としてあげられる。またこの型の対象者は農業と家事等の両方の担い手となる負担の高い状況へと移行する前に、農外就労を経験する。しかし、この農業と家事等の中心的担い手となることによって農外就労をやめることが多い。

この型に該当する対象者は14名、この14名の平均年齢は53.3歳である。農外就労の業種は14名のうち、12名が土木・建築関係で、残り2名は旅館のまかないであった。農外就労に出ている時期は、農外と農業と家庭内の役割を同時に担当している負担が高い状況となる。農外就労の大半は集落の周辺の道路工事などで、農業のかたわらにいわゆる「日稼ぎ」として行なっている。農閑期にのみ農外就労し、かつ冬期間は失業保険を受けて生活費の一部とすることも多い。

この型の特徴は、あくまで農業を辞めずに農外就労にも出ることにある。そのため生活のなかで、仕事の負担が高い状況になり、一度やめた農外就労を、その後再開する者はほとんどおらず、再開しても、業種は肉体的にも無理のない、旅館でのまかないなどを選んでいた。農外就労を辞めた対象者は、農業型同様に農業からも引退し、家事・育児中心の生活に展開すると考えられる。(図3)

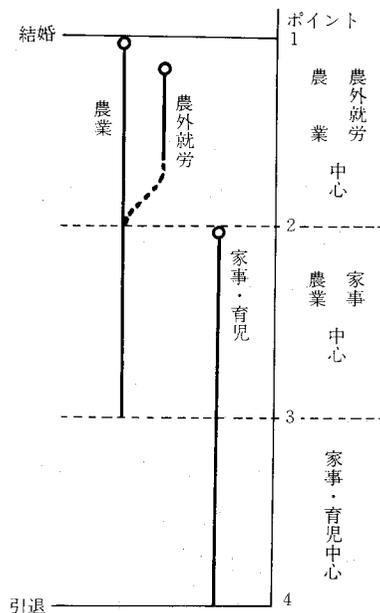


図3 II農業+農外就労経験型

Ⅲ. 農業＋農外就労移行型

この型は、Ⅱ農業＋農外就労経験型と同様に農外就労にでているが、Ⅱ型と異なるのは、その農外就労に従事した結果として、農業あるいは家庭内の役割に何らかの変化をきたしていることである。

この型に分類できるのは、対象者の話によって確認することができた1名の例を加え、計11名で、対象者10名の平均年齢は52.5歳であった。

この型の事例としてはT.Cさん、大正14年生まれの64歳（調査時）である。昭和18年に結婚、昭和19年から32年にかけて、5人の子供を生む。就労状況は、結婚当時は農業のみで、家事・育児はT.Cさんの姑Nさん（90歳で健在）とNさんの姑（昭和23年死亡）が担当していた。昭和41年（T.Cさん41歳）から43年にかけて、T.Cさんも左草集落内道路工事に農閑期のみ従事する。その後昭和46年には、当時第4子が通っていた地元の高校に冬期設置される寮の寮母として勤める（湯田町は豪雪地帯のため、冬期間のみ寮が設けられている）。この寮母の仕事を始めることにより、農業については中心的担い手から退き、家事もNさんと分担して受け持つようになる。この寮母の仕事を昭和56年に辞めてからは、家事中心の生活へと変化する。

以上のような事例から考えると、農業＋農外就労移行型においては、結婚直後はⅠ農業型、Ⅱ農業＋農外就労経験型と同様に農業中心の生活であるが、農外就労は家事の中心的担い手となってからも（第2ポイント）やめず、逆に農業か家事等の役割のどちらかから退くことになる。

農外就労の業種は、農業＋農外就労経験型で多かった土木・建築関係とは異なり、縫製や学校・施設の職員などであった。これらに共通しているのは、農外就労が「日稼ぎ」的なものではなく、一定の期間、会社に雇用されたり、団体に委嘱されたりしている点にある。安定的な農外就労に従事したことが農繁期でも農外就労を優先させ、次第に農業から離れていくことを促したのではないかと考えられる。

また、農外就労の勤続年数をみると、11名の平均は18.7年で、Ⅱ型の勤続年数10.1年を上回っている。このことから、同じ農外就労を経験してもⅢ型の業種がⅡ型の業種とは内容が異なることが分かる。また、11名中7名が調査時点で農外就労を続けていた。（図4）

Ⅳ. 農外就労継続型

この型は結婚した時点で、常勤の農外就労をしており、生活の中心はその仕事にあって、農業また家事・育児等の役割には中心が置かれていないものである。家事・育児は上の世代が中心となって担っている。

この農外就労継続型の事例は、昭和4年生まれのS.Sさんである。S.Sさんは昭和23年に18歳で結婚する。この時、既にS.Sさんは教師であり、仕事を辞めないことを条件に

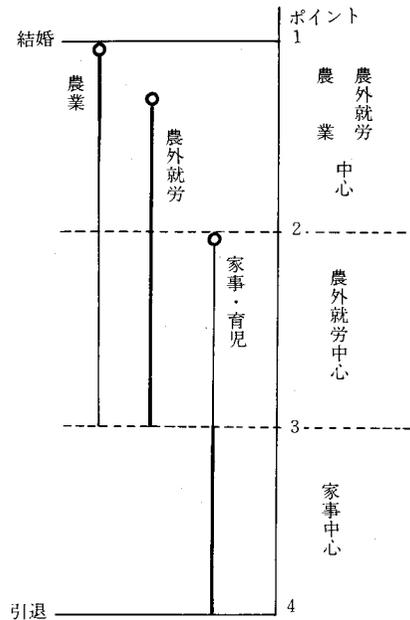


図4 III農業+農外就労移行型

結婚している。当時、姑とその母が健在で、家事・育児はこの二人が担当していた。昭和25年から34年にS.Sさんは4人の子供を生み、子どもが学校に入るまでは仕事の傍ら、子どもたちの面倒も見たが、子どもが就学するようになると舅、姑がPTAなどにもいくようになり、面倒は舅等に任せることとなった。昭和51年(S.Sさん47歳)、長男がEさんと結婚して同居する。Eさんも農外の仕事を持っている(保母)。昭和52年(S.Sさん49歳)に、舅、姑が相次いで体の調子を悪くし、Eさんとともに介護する。昭和56年には、介護と孫の面倒を見るためにS.Sさんは教員を辞め、さらに農業をやるようになる。家事はEさん中心であるが、S.Sさんも分担している。現在は農業と家事・育児を担当している。

以上の例に見られる農外就労継続型に属する対象者8名は、平均年齢が41.3歳である。

この型は、結婚時点で農業のみという農業型とよく似ているが、農業型とこの型を比べると、平均年齢が農外就労継続型で25.7歳若い。農業型の次世代がこのIV型に属することが考えられる。この型の農外就労の内容は、縫製、食品などの製造業が4名、教員・保母が4名である。(図5)

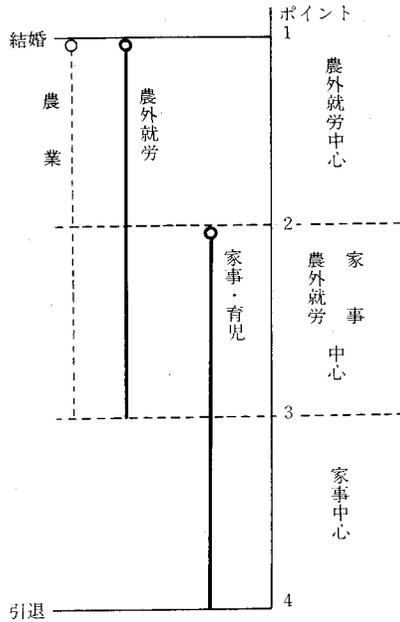


図5 IV農外就労継続型

V. 家事型

以上の4つの型のいずれにも分類されなかった4名は、平均年齢28.3歳で、5つの型のうちで最も若い。

いままでの型の分析からI型においても、IV型においても、女性たちは農業をやりながらあるいは常勤の職業を持ちながら、同時に家庭内の仕事も担当していた。しかしV型の場合は、家事等の専業となっており、その事例としては、T.Nさんをあげることができる。T.Nさんは昭和39年生まれの25歳（調査時）で、昭和59年に結婚している。結婚当初は湯田町内の食品製造業の会社に勤務し、家事は姑のKさんが担当している。昭和59年に長男を出産したが、子供は実家に見てもらうなどして仕事は続けていた。その後、昭和62年に長女を出産した時点から、T.Nさんは仕事を辞めて育児中心の生活となっている。

このV型は4名数えることができ、結婚後も農外就労を継続しているが、子供の出産を機会に農外就労をやめている。農外就労を途中でやめるという点では、II型と類似しているが、この家事型がその他の型と異なる点は、農業にかかわったことがない点にある。農外就労をやめた彼女らは農業をやらず、家事・育児中心の生活に移るように見える。(図6)

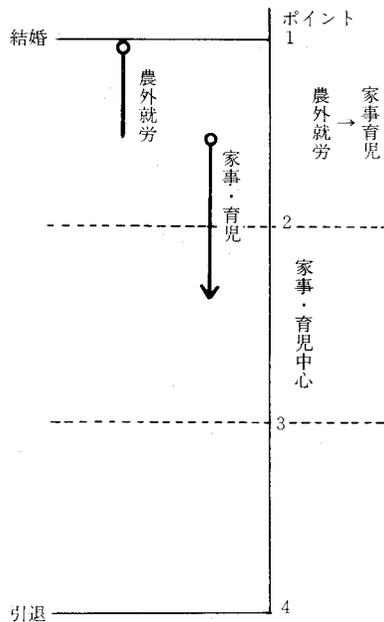


図6 V家事型

3. 各型の関連

次に前節で検討した各型を世帯ごとにまとめてみると、平均年齢では、Ⅱ農業＋農外就労経験型とⅢ農業＋農外就労移行型がほぼ等しく、Ⅲ型11名のうち、Ⅰ型と同居しているのは6名で、Ⅲ型のみの世帯が2戸、Ⅲ型が2名いる世帯が1戸となっている。Ⅲ型を基準に世帯内の関係を見ると、上の世代との同居が多いことがわかる。一方Ⅱ型では、Ⅱ型のみの世帯が6戸、Ⅴ型との同居が2戸、Ⅳ型との同居が2戸と、Ⅱ型を基準にすると、下の世代との同居の傾向がよみとれる。農外就労の継続を可能にするか否かを分ける条件の1つは、上の世代との同居か、下の世代との同居かにあるのではないだろうか。少なくともこの左草集落では、同じ世代に属するⅡ型とⅢ型をどちらの型に分けるかに影響を与えているのはこの点と考えられる。さらにⅣ型は、Ⅰ型と同居する者が8名中4名となっていた。また、Ⅰ型からⅣ型は、Ⅰ農業型からⅣ農外就業継続型へと平均年齢が低くなっている。これを出現年代順に並べると、まずⅠ農業型があり、ⅡとⅢの農業＋農外就業の型は過渡的な型と考えられ、Ⅳ農外就労継続型へ移行している。このⅠ型からⅣ型は、農業をどこかで経験している点で共通している。

以上4つの型に分類し切れなかったⅤ型はどのようなものなのだろうか。Ⅴ型の対象者のいる世帯をみると、4つの世帯のうち3戸まではⅡ型あるいはⅢ型に分類される上の世代と同居している。世帯単位で考えた場合、Ⅴ型の人たちが農業においては余剰した労働力となり、農業、農外就労、家事・育児の3つのバランスを世帯内でとろうとすると、家

事・育児の担当者の必要が、世帯内に年齢の老若に関わらず、V型をつくるとも考えることができる。

IからVまでの型で、一見特異な型として存在するV家事型を、またそれが若い世代で出現したということをどのように位置づけていったらよいのだろうか。(図7)

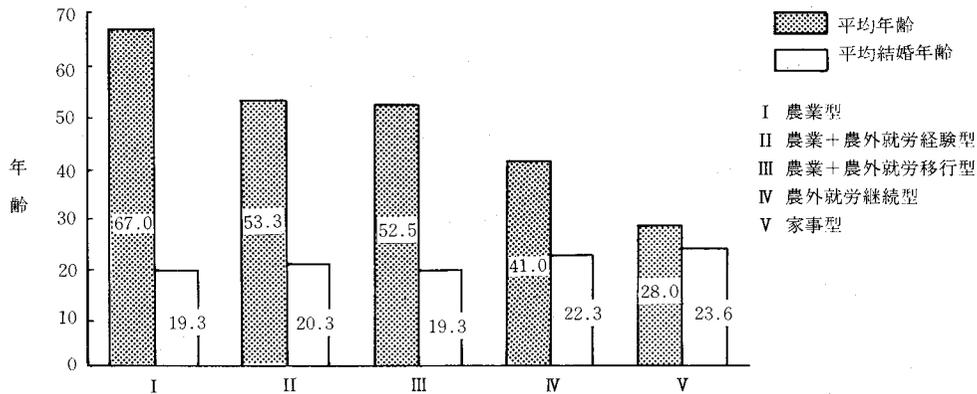


図7 型別平均年齢、平均結婚年齢

4. 各型と他の要因との関連

・農業経営規模との関連

農村の女性の就業構造が農家の経営規模に規定されているということは、1988年調査でも指摘されていることだが、これまでみてきた型との関係では、II型とIII型は経営規模において違いがみられた。II型は農業、農外就労と家事等の役割を担当し、負担が高くなる状態になる前に農外就労をやめている。さらに上の世代が農作業から引退する状況になった場合、田の耕作面積が大きいII型は、農外就労を続けながらでは上の世代が担っていた分の農業も引き受けていくのは難しい。この経営規模の大小が第2ポイント後に農業中心の生活へもどるかどうかが決める理由となっていると推測できる。(図8)

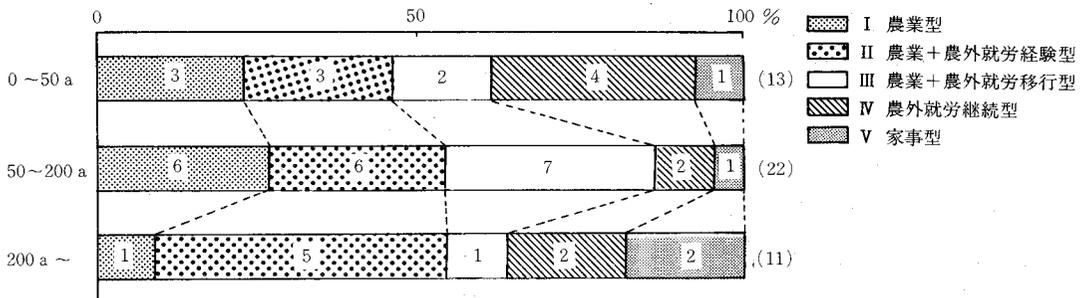


図8 型別世帯の経営規模(田)

また畑の耕作面積をみても、Ⅱ型に属する人の世帯では、農業経営規模が大きいものが多いことがわかる。それに比べて、Ⅲ型は中程度の耕作規模の農家が多い。さらに、農業をやらぬ農外就労にもでないで、家事・育児専業となっているⅤ型に属する人のいる世帯については、世帯経営面積が大きいことが注目できる。(図9)

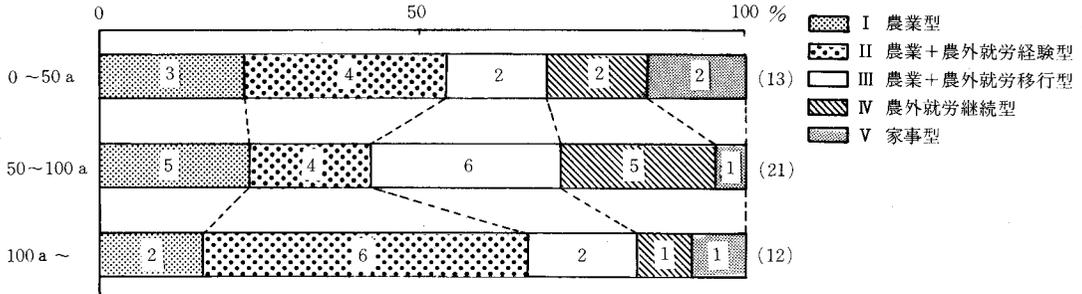


図9 型別世帯の経営規模(畑)

ここでⅤ家事型に分類される4名のケースを少し詳しくみると、4名のうち3名までの世帯が農業経営規模は平均(131.7 ㏊)⁷⁾を越えている。残りの1世帯については対象者の夫である世帯主が公務員であり、収入に対する農収の割合は1割であることから、農業は生活の中心とはなっていない世帯であることがわかる。また、4名とも病気などによる理由で農業や農外就労ができないということもない。

次に、耕作面積と共に、ここでは各世帯の全収入に占める農業収入の割合と各型の関係についてみていきたい。農業収入割合の低い(1~3割)層ではⅣ農外就労継続型が多く、また農業収入の割合が高い(7~10割)世帯には、Ⅱ型が多いことがわかる。(図10)

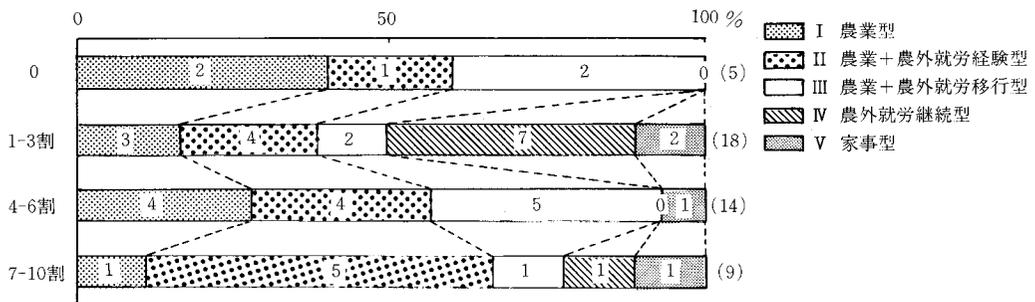


図10 型別世帯の農収の割合

以上の農業規模についての検討によれば、Ⅱ型を存在させる規定要因として、農業経営規模の大きさをあげることができるのではなかろうか。

・農業に関する意識との関連

ここでは、各型にもなう若干の意識構造についてもふれておきたい。ただし、意識に関

7) ここでは、経営耕地として田についてのみみている。

してはデータの制約から、あくまで参考程度とし、ここでは簡単にその結果を示すにとどめておく⁸⁾。

5つの型のうち、II型については農業経営規模との関連性が高いことは既に述べたが、農業に関する意識についても、特徴がいくつか表れている。

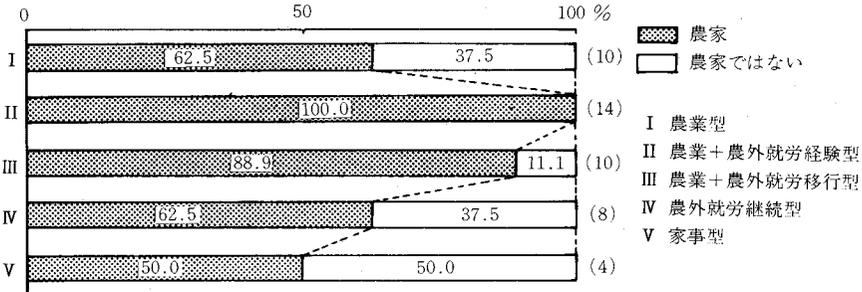


図11 自家は農家

「自家が農家であると思うか」(図11)という質問と型とのクロス集計の結果を検討してみると、II型の全員が「農家である」という意識を持っていることがわかる。農業に携わらない者は農家であるという意識が薄いこともわかる。

また、「農業は経済的に割に合う職業か」(図12)という質問に対しては、II型では農業に対して肯定的である。これに対してIV型では、農業に対する意識は否定的にでている。

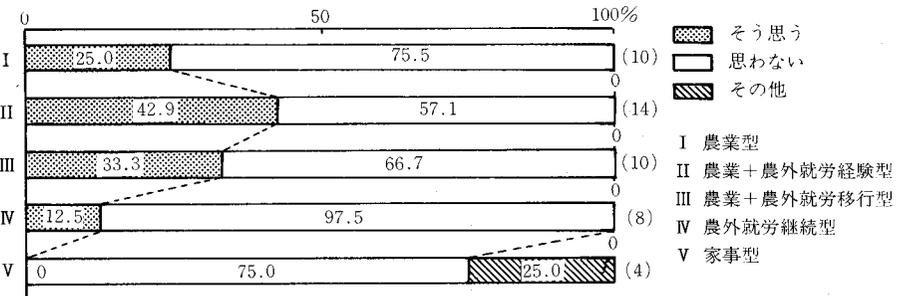


図12 農業は割に合う職業か

次の「農業はやりがいがある職業か」(図13)という質問に対しては、ほぼ農業から引退しているI型と、ほとんど農業に従事したことがないV型を除いた3つの型で「やりがいがある」という回答が多くでていることは興味深い。この結果は、実際に農業に従事している者は「農業はやりがいもあるし、割りにも合う」と考えているのに対し、現在農業に従事していない者は「農業はやりがいはあるが、割りには合わない」と見ていることを推測させる。

8) 本研究においては、意識に関する詳細な分析を行なうことは厳密な意味ではできない。それは、回収したデータは、ほぼ全数に近いものではあるが、43名～46名と少数データであり、統計的に意味のある分析は難しい。

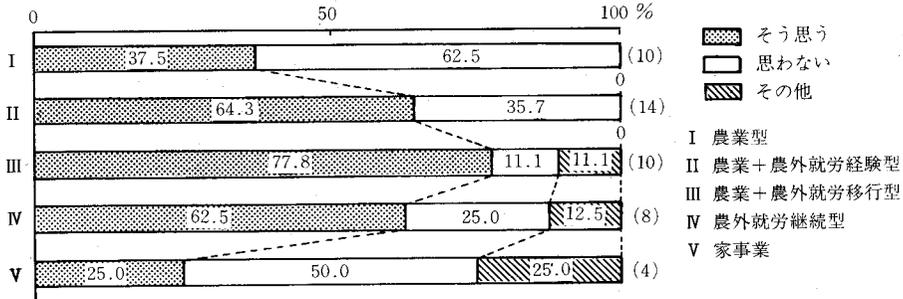


図13 農業はやりがいがある職業か

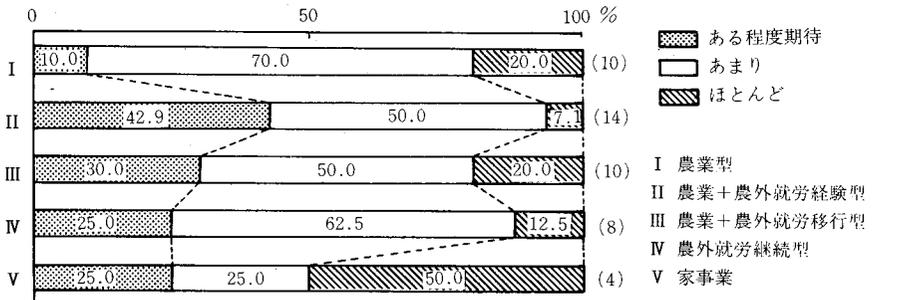


図14 左草農業への期待

さらに農業に対する期待や展望については、「左草農業への期待」(図14)と型とのクロス結果としてみる事ができる。全体的には期待できないという傾向がみられるが、そのなかでII型では「ある程度期待できる」が若干多いことがわかる。また今後の展望についても同様の結果がでていいる。「若い人が農業をやることについて」(図15) どう思うかを質問してみると、II型では、理想として若い人が農業をやるようになるのがよいと考えている者が他に比べて多くでている。

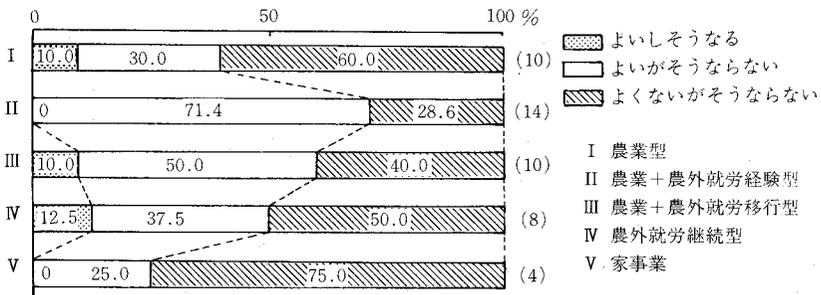


図15 若い人が農業をやることについて

以上のように、全体としてⅡ型に属する人の農業に対する意識は、他の型とはやや異なるということが注目できる。

・「生産グループ」との関連

以上、主に農業との関連を中心にみてきたが、左草集落において農業を考える場合、考慮しなければならないものとして、「生産グループ」と呼ばれる女性たちの農業生産のグループの存在をあげないわけにはいかない。この左草の「生産グループ」の成立は、左草集落の女性たちの活動の歴史からみていく必要があるが、本論文では紙面の都合上このグループの存在のみを指摘することにとどめておく⁹⁾。

〈4〉むすびにかえて

本調査の結果から以下のことが指摘できる。第1には、農業の担い手についてである。Ⅰ型からⅣ型までは、時期や関わり方の程度は異なるものの、農業の担い手としての役割が女性の役割のなかに組み込まれているが、Ⅴ型は、調査時点までのところ農業の担い手としての役割を持たない。「農家」にあって農業を担わない女性が、今後も農業と関わらないのかどうかは、「農業」の存続がどうなっていくのかという点からは注目される。

第2には、農外就労の内容が、日稼ぎのように不定期なものであるか、寮のまかないのようにある一定期間継続的に雇用されるものであるかの違いによって、農外就労の継続期間

9) 左草集落は冬は数メートルの雪が積もり、昭和40年頃までは冬期の交通手段がなく、閉鎖された地域であった。そのため、女性たちはその期間、日用品の調達にも困り、そのため「婦人会」という組織を作り、共同購入を始める。時期を同じくして、生活改善運動なども高まり、左草集落の女性たちの活動は「生活」レベルで結集していった。

昭和40年代にはいってからは、様々な形で左草の生活が変わり始める。農業においては「機械化」「兼業化」が進行し、また道路の整備や自動車の普及などが起きる。それらによって、地域のなかに集中していた女性たちの生活圏は、地域外へと広がっていく。その過程が、先に述べた型の変化となって表れていくとも考えられる。

多くの女性たちは農外になにかしらの仕事をもつようになったとき、様々な問題が起きたと回顧する。(例えば、子供が学校から帰ったとき、家に誰もいない。朝早くでて、夜遅くまで働き、家族と顔をあわせられない。地域の婦人会の活動も停滞していく)そのような時に、農協の婦人部のなかで出た意見が「日稼ぎで得る現金収入を休んでいる畑から得られないだろうか」というものであった。この発案が「有機農業」と合致して、様々な過程を経たものの、野菜を生産して収入を得るという現在の「生産グループ」という形に結集してきている。

以上のような「生産グループ」の成立過程を考慮すると、このグループに参加している女性たちのグループの生産＝農業に対する意識、あるいは左草集落という地域に対する意識は他と異なるということが考えられる。

もし、このグループの活動をひとつの女性たちの就業に対する積極的な働きかけという捉え方をすれば、今後、どのような形でこのグループの活動が展開されていくか、あるいはどんな形で若い世代を取り込んでいくかが、問題となるところである。

や、その後の農業と農外就労、家事・育児役割の担い方をどうしていったのかに違いが出ていたという点である。先に取り上げたように、Ⅱ型とⅢ型の違いには、農業規模の違いばかりでなく、この点の影響もあるものと指摘できよう。

第3に、世帯内での役割配分において注目できるのは、家事・育児の担い手の変化と、農業の担い手の変化である。ⅠⅡⅢ型では、結婚した当時は、農業中心の生活であり子供が生まれても育児は、その子供の祖母または、曾祖母が中心的に担っていた。これに対して、Ⅴ型では、子供の母親、(Ⅴ型本人)が担当するようになっている。この変化は、農村に生活する家族の「近代化」を示唆する変化と考えられるが、本研究では、事実の指摘以上の展開はできていない。

農業の担い手の変化については、1番目で指摘したように、担い手自体がいなくなるということ以外にも指摘できる変化がある。ⅠⅡⅢ型では、農業を中心に担っていた時期が結婚当初から中年までで、その後は家事・育児の中心的担い手へと移行しているが、次世代に農業の担い手がない場合、年をとっても農業の担い手であり続けている点である。しかし、現状の対処がこのまま続くかについては、ⅠⅡⅢ型がみな引退するまでみただで結論を出さねばならない。さらに、農業に関する意識の結果やなぜ農外就労に出るのかの理由をみると、各型での農業観、農外就労についての意識に特徴的な違いがあり、それが現在農業の担い手である層は、農業に関して肯定的であるが、若い年齢層では、農業に対する意識が肯定的だとはいいがたいという特徴であることを考えると、推察の域はでないが、今後の展開としてⅤ型がⅡ型のような「農業への回帰」を果たすのはむしろかしいように考えられる。

各型の平均年齢から推察すると、型自体が、各世代の特徴であり、さらにはその世代の生きた「時代」の特徴を現しているようにもみえるが、本調査はこの点についての資料をもたない。ただし左草においては女性たちの「主体的な」農業生産グループ活動が存在しており、このグループ活動とこのグループに関わる世代の変化との関係は社会の変化と個人のライフコースの関わりをどう位置づけるかのてがかりとなるものと考えられる。

グループは農協などの協力もあって発足したものであるが、積極的に左草という農村集落で生きている女性たちの活動であることは間違いない。この活動がこの世代の特殊な「農業への回帰」の動きにとどまらず、今後若い世代を吸収していくのかもしれない。このグループの活動が、左草女性の生活のなかでどんな位置にあるのかは、今後のグループの展開によって、明らかにされるだろう。現在農外就労を中心に行っている女性たちが年齢的な限界をもって農外就労をやめた時、グループのような収入となる農業が、その人たちを吸収するのだろうか、という点も興味深いものがある。